

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センター創設以来の事業のひとつです。海外の日本研究者と市民との交流を促進するために、原則月一回、年間十回程度、京都市内の公共スペースで、日文研を訪問中の世界さまざまな国の日本研究者に、自分の研究について自由に語ってもらい、参加者との知的交流を図ろうとするものです。このフォーラムの報告書の公刊によって、日文研フォーラムへの皆様の関心と理解がさらに深まることを願っております。

国際日本文化研究センター

所長 猪木武徳

● テーマ ●

萬葉集と風土記に見られる不思議な言葉 と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布

**Strange Words in the *Man'yōshū* and the *Fudoki*
and the Distribution of the *Ainu* Language
in the Japanese Islands in Prehistory**

ついに日本列島の原住民として認められたアイヌ民族の方々へ

tanepo sisam utarpa utar yaykopeker ayne aynu utari anakne yaunmosir utar
hoski okay utar ne ruwe eraman siri ne. nean aynu utari nispa utar katkemat
utar ku-koonkami na¹

● 発表者 ●

アレキサンダー・ヴォヴィン

Alexander VOVIN

ハワイ大学マナーア校 東洋言語文学部教授

Professor, University of Hawaii at Manoa

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



発表者紹介

アレキサンダー・ヴォヴィン

Alexander VOVIN

ハワイ大学マノア校東洋言語文学部教授

Professor, University of Hawaii at Manoa

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

- 1987年10月 文学博士（サンクトペテルブルク大学）
- 2003年8月 ハワイ大学マノア校東洋言語文学部教授
- 2008年1月 国際日本文化研究センター外国人研究員
- 2008年10月 ボーフム大学日本語日本文学科主任教授

著 書

1. *Koreo-Japonica: a critical study in the language relationship*, The Center for Korean Studies, University of Hawaii (forthcoming)
2. *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese, Vol.2: Verbs, Adverbs, Conjunctions, Particles, Postpositions*, Folkestone: Global Oriental, 2008
3. *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese, Vol.1: Sources, Phonology and Writing System, Lexicon, Nominals*, Folkestone: Global Oriental, 2005
4. 長田俊樹氏と共編『日本語系統論の現在』日文研叢書 31、京都：国際日本文化研究センター、2003年
5. *A Reference Grammar of Classical Japanese Prose*, London: Routledge/Curzon Press, 2003

アイヌ語と日本語との関係は非常に複雑であると思う。近年、上村幸雄氏はアイヌ語と日本語が同源要素を持つ可能性について多数論文をお書きになり（上村 2002, 2003a, 2003b, 2007, 2008）、大変勉強になった。私も以前は諸言語の関係を同源説の観点から研究していたが、ここ八年間に私の研究の焦点は日本列島諸言語とその周辺の諸言語の接点に移り変わったので、今回は主にアイヌ語から日本語への借用語とそれに基づいた上代日本列島におけるアイヌ語の分布について発表させて頂くつもりである。

現在通説となっている伝統的な意見は、上代日本語にはアイヌ語からの借用語は殆どないというものである。たとえば佐伯梅友氏は、上代中央日本語に見られる *kanipa* ~ *kani^hba* 「桜の皮」のみをアイヌ語の *karinpa* 「山桜の皮」の借用語として挙げられた（佐伯 1959: 32）。しかし、以下で示すように、*kanipa* ~ *kani^hba* 「桜の皮」のみが唯一の例ではない。

アイヌ語が上代日本列島において少なくとも東北地方の全地域で話されていたということとはもう定説になったと言ってもいいであろう。地名はいまでもなく、東北の方言には「山の言葉」として残っているアイヌ語の言葉もある（金田一 2004: 240-47）。また、関東の古い地名を見ると、「武蔵」（元来万葉仮名音声表記「牟射志」/*mu^hzasi^h*）、「阿之賀利」/*asi^hkari^h*などは日本語の地名ではなく、アイヌ語であると解釈できる。

〈地名…関東〉

「牟射志」/mu^uzasi/ 「武蔵」

たとえば、「牟射志」/mu^uzasi/ は東国歌に出る。

萬一四・三三七九（武蔵国の歌）

和我世故乎 安杼可母伊波武 牟射志野乃 宇家良我波奈乃 登吉奈伎母能乎
わがせこを あどかもいはむ むざしのの うけらがはなの ときなきものを
我が背子を あどかも言はむ 武蔵野の うけらが花の 時なきものを

「牟射志」/mu^uzasi/ は *munsasi に遡る。² *munsasi は日本語としての解釈は困難だが、アイヌ語では完全に意味が通る。アイヌ語 mun「草」(服部 1964: 196)´sa「濱」(知里 1956a: 113)´「野原」(Batchelor 1926: 409)´-hi三人称所有接尾辞(日本語では -hi は -si になる)。² 後述の上代東国日本語の言葉である「思太く之太」/si^uda/「時」へアイヌ語 hi^uta も参照)。従って、武蔵は「牟射志」/mu^uzasi/ へ *mun sa-si へ *mun sa-hi「草の野原」であろう。武

蔵は東京に変わる以前は、日本で一番大きい草の野原だったにちがいない。

「阿之賀利」/asi^hgari/ 「足柄」

次に「足柄」^{あしがら}を見てみよう。「阿之賀利」/asi^hgari/ または「安思我良」/asi^hgara/ という地名も東国歌に出てくる。

萬一四・三四三一（相模国の歌）

阿之我里乃 安伎奈乃夜麻尔 比古布祢乃 斯利比可志母與 許己波故賀多尔
あしがりの あきななのやまに ひこふねの しりひかしもよ ここばこがたに
足柄の 安伎奈の山に 引こ舟の 後引かしもよ ここば来がたに

萬一四・三三六三（相模の国の歌）

和我世古乎 夜麻登敵夜利豆 麻都之太須 安思我良夜麻乃 須疑乃木能末可
わがせこを やまとへやりて まつしだす あしがらやまの すぎのこのまか
我が背子を 大和へ遣りて 待つ時す 足柄山の 杉の木の間か

阿之賀利 /asi^hgari/ または安思我良 /asi^hgara/ には後世「足柄」という漢字が当てられたとしても、地名として余り意味が通じないだろう。安思我良 /asi^hgara/ は阿之賀利 /asi^hgari/ より頻繁に現れるが、この音声上の違いは /asi^hgari/ > /asi^hgara/ の音声同化の結果であるう。ところで、阿之賀利 /asi^hgari/ は北海道にある「石狩川」の Isikari [isigari] を連想させはしないだろうか。アイヌ語の sikari [sigari] は sikari [sigari] 「川の中の水の回流する所」または si-kari 「迂回する、回る、回流する」として解釈される傾向がある(知里 1956a: 120)。アイヌ語の kari は「回る、徘徊する」という意味を持っている(菅野 2002: 202)。しかし、kari は説明がつくとしても、残りの部分の asi- は説明が困難である。アイヌ語には一人称の複数の包括接頭語 a- があるが、その a- は他動詞にしか付かない。-si- はアイヌ語の si- 「自分」と解釈する可能性もあるが、私の意見では、そのような解釈は信憑性が低い。では、もう一つの可能性を考えてみよう。アイヌ語の千歳方言、沙流方言と旭川方言には askanne 「きれい、清潔な、清い」という言葉がある(中川 1995: 6)。(田村 1996: 28)。(菅野 2002: 15)。(太田 2005: 10)。アイヌ語では -m- 子音群はいつも -m- に変化するため(知里 1956b: 169-71)。(中川・中本 1997: 15)。(アイヌ祖語では * -m- を再構しなければならぬ(Vovin 1993: 38)。従って、askanne は *askarne になる。*askarne の -ne はアイヌ語の繫辞の ne であるから、語幹は *askar- である。アイヌ語の接尾語 -h は場所を表す(知里 1956b: 174)。

こう考えると、*askar-i は「清い所」になるだろう。上代日本語には閉音節がなかったため、*askar-i は *asikari として借用され、*asikari は二次的な鼻音化で as^hgari 「阿之賀利」または「足柄」になってしまったのであろう。

〈地名：中部〉

能登半島の「能登」

関東の地方だけではなく、中部の地方にもアイヌ語地名が残っていると思われる。たとえば、能登半島の「能登」も『萬葉集』に見られる。

萬一七・四〇二六（家持の歌）

登夫佐多鵜 船木伎流等伊布 能登乃嶋山 今日見者 許太知之氣思物 伊久代神備曾
とぶさたて ふなぎきるといふ のとのしまやま けふみれば こだちしげしも いくよ
かむびそ



図1 家持がこの歌を詠んだ所から見える能登島(著者の写真)

とぶさ立て 舟木伐るといふ 能登の島山 今日見
れば 木立繁しも 幾代神びそ

能登の島は現代の石川県の七尾市の北にある能登
半島である。

「能登」(上代日本語 *noio*) は日本語では解釈でき
ないが、アイヌ語の *not* 「岬」、「あゝ」(知里 1956a:
68)´ *not-koi-kamuy* 「岬の神」にも見られる *not* 「岬」
(山本 2004: 186) としてであれば説明できるであ
ろう。能登半島は半島とも言えども、やはり大きな岬
である。Batchelor のアイヌ語辞典には、*not* 「岬」以外にも、*not-o* 「大イナル岬」が載せ
られているが (1926: 316) が、他のアイヌ語の資料で支持されていない。Batchelor の語彙
記録は信用性に欠ける。他のアイヌ語の方言を見ると、*noto* は「風」である。しかし、
前にも言及したように、上代日本語には閉音節がなかったので、アイヌ語の *not* 「岬」が
上代日本語に入り、反響母音 */o/* が付くのは不思議ではない。

氣多神社・氣太神社

能登半島の南西の羽咋市の北にある氣多神社は氣太けだ神宮として萬一七・四〇二五の題に出でくる。

萬一七・四〇二五（家持の歌の題）

赴參氣太神宮行海邊之時作歌一首

氣太神宮に赴き參り、海辺を行く時に作る歌一首

「氣多」（上代日本語の *ke^ata*）にしても、「氣太」（上代日本語の *ke^ada*）にしても、明らかに「氣多」「氣太」は日本語ではない。上代日本語の言葉の最初の音節には甲類母音 /e/ も、乙類母音 /e/ も、ほとんど現れない。両方とも二次的であるから (e > *ia, e > *ai ~ *ay) 不思議ではない。『萬葉集』に出る「氣太」には無声子音 /t/ ではなく、鼻音有声子音 /d/ が現れるのはこの神社の名前の語源に著しいが、それについて、少し後で述べる。

残念ながら、私は羽咋市の氣多神社を訪問する機会がなかったが、能登半島の南東近く

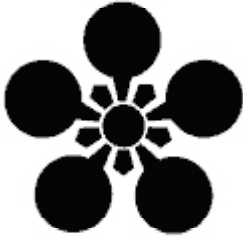


図3 加賀藩の梅鉢紋



図2 氣多神社の馬（著者の写真）

にある富山県の高岡市の北にも「氣多神社」がある。幸運にも、高岡市の「氣多神社」には訪れる事ができた。その「氣多神社」に入ると、先ず目に入るのは写真の馬である。

その馬の脇に星のような、花のような印が見える。神主にその印について尋ねた所、「あれは加賀前田藩の紋かもしれない」と教えてくれた。加賀藩の紋は加賀梅鉢で、次の通りである。

前田家の紋は馬に付けられた印によく似ているけれども、全く同じではない。神社の入り口に近づくと、天井に次のような電灯が見える。

電灯のガラスに裝飾された印も馬に見られた印と同様、加賀藩の梅鉢紋に非常に似ているが、多少の違いが見られる。それから、歴史上の問題もある。

先ず、加賀藩主前田家の祖先である前田利家（一五三八―一五九九）は、桶狭間の戦いに始まり、織田



図4 気多神社の電灯（著者の写真）



図5 気多神社の本殿（著者の写真）

信長に仕えた。そして、前田家の始まりは十六世紀で、前田家の出身は越中ではなく、尾張である。が、高岡市の気多神社の本殿は鎌倉時代のものである。神社の歴史は確かに今に残っている鎌倉時代の本殿よりもっと古いと考えるのもいいだろう。本殿には勿論入れないが、神主によると、中には同じ図柄があるそうだ。

アイヌ語には *keta* [keda ~ keDa] 「星」という言葉がある。なお、アイヌ語には母音の間と鼻音子音の後にある無声破裂音 /p/, /t/, /k/ はいつも有声破裂音 [b], [d], [g] または半有声破裂音 [B], [D], [G] として発音される。しかし、羽咋市の気多神社は『萬

葉集』の時代には「氣太神宮」と言われた。上代日本語の「氣太」は確かに /ke^hda/ だった。アイヌ語の *keta* [keDa] 「星」は上代日本語には /ke^hda/ になるのはなぜだろうか。理由は簡単だ。アイヌ語のように、上代日本語には有声破裂音 [b], [d], [g] または半有声破裂音 [B], [D], [G] はなかった。存在した破裂子音は無声破裂音 /p, /t, /k/ と鼻音有声破裂音 /^mb/, /ⁿd/, /^ŋg/ のみであった。従って、アイヌ語の有声破裂音 [b], [d], [g] または半有声破裂音 [B], [D], [G] を反映する方法は二つだけだった。それを無声破裂音 /p, /t, /k/ にするか、或いは鼻音有声破裂音 /^mb/, /ⁿd/, /^ŋg/ にするかである。アイヌ語の *keta* [keDa] 「星」が「氣太」/ke^hda/ と書かれたのは、一番目の方法に当たる。また、この例に限らず、アイヌ語からの古い借用語におけるアイヌ語の有声破裂音 [b], [d], [g] または半有声破裂音 [B], [D], [G] は、上代日本語では常に鼻音有声破裂音 /^mb/, /ⁿd/, /^ŋg/ になる³。この現象については、後ほど、その他の例によっても証明される。

大昔は今の気多神社が建っている所でアイヌ語の一種を話していた原住民が星を崇拜していたと考えてもいいだろう。神社の名前はその名残だと思われる。そして、神社の中にあちこちに見られる星のような印もその名残かもしれない。勿論、星の図柄が後世に加賀藩の梅鉢紋とある程度混合した可能性も否定できないであろう。

小矢部川

富山県には「部」/be/ で終わる川の地名が二つある。富山県の西に流れる小矢部川と富山県の東に流れる黒部川である。では小矢部川から見てみよう。

一般に、小矢部川は奈良時代には射水川と呼ばれていたと信じられているが、実際奈良時代には小矢部川は津沢南方（現在の小矢部市にある）で庄川と合流し、射水川となった（坂井 1979: 221）。従って、津沢までは小矢部川という地名が奈良時代にも存在していたと思われるが、文献上では鎌倉時代または南北朝時代に成立した『源平盛衰記』の第二十巻に初めて見られる（高瀬 1994: 65）。

日本語の地名として「小矢部」は変わっている。特に最後に出る「部」/be/ は余り意味がなく、当て字らしい。その「部」は北海道に於ける川の地名の「別」/betu/



図6 南砺市福光町の小矢部川の中流（著者の写真）

を連想させる。たとえば、北海道の「幌別」は実際アイヌ語の *poro pet* 「大きい川」である。前にも言及したように、アイヌ語 *poro pet* は「*poro bet*」または「*poro Bet*」として発音されるため、日本語では *Forobetu* > *Horobetsu* になった。前述のアイヌ語 *not* 「岬」> 上代中央日本語「能登」と同じように、アイヌ語の *poro pet* から借用された「幌別」*Horobetsu* は反響母音を加え、日本語の地名になったが、「小矢部」の「部」*/be/* の場合には、反響母音を加えず、アイヌ語の *pet* 「川」の最後の子音 *-t* はそのまま脱落した。こう説明すると矛盾しているように見えるかもしれないが、実際、上代日本語は音節末子音を持つている外国語を借用する時に、音節末子音に反響母音を加える傾向と、音節末子音を脱落させる傾向の両方があった。たとえば、上代日本語の *katana* 「刀」は上代韓国語の **hātān nārh* 「刀」(**hātān* 「一」、**nārh* 「刃」)の借用語²⁾(Yovin 2005a: 76) **hātān* の *-n* と **nārh* の *-rh* は脱落した。また、アイヌ語 *pet* 「川」を反映する「部」*/be/* は東北の地名にも見られる。たとえば、青森県の青森市にある内真部^{うちまんとへ}という川の名前がそうだ(西鶴 1995: 9)。東北の方言の大部分は上代日本語の */*b/* と */*d/* をそのままに保存するので、内真部の *-nb-* 「*-b-*」はアイヌ語の有声子音 *[b]*, *[d]*, *[g]* が上代日本語の鼻音有声子音 */*b/*, */*d/*, */*g/* に反映されることを証明する。

「小矢部」の「小矢」*/oya/* も「小さい矢」ではなく、アイヌ語であると思う。岩手県

の紫波郡には於夜志別川おやしべという川あり、この名前はアイヌ語の *oyaw* (*kina*) *us pet* 「はこべが無数に生えている川」と解釈される (西鶴 1995: 111)。しかし、西鶴氏の解釈には十分説明できない点がある。先ず、アイヌ語 *oyaw* は「蛇」であり、「はこべ」ではない。勿論、アイヌ語 *oyaw kina* は「はこべ」であるが、これは明らかに *oyaw* 「蛇」と *kina* 「食用の草」からなる合成語である。第二に、於夜志別おやしべから *kina* 「食用の草」がなぜ消えたかという説明がない。第三に、アイヌ語の合成語 *oyaw kina* 「はこべ」は樺太の白浦方言でしか使われない (知里 1976: 153)⁵。アイヌ語 *oyaw* 「蛇」は樺太のライチシカ方言、南北海道の人雲方言の古い祈りにも *oyaw* 「蛇」と *oyaw kamuy* 「蛇の神」として使われている (服部 1964: 190)。それ以外にも、樺太アイヌ語 *oyaw* 「蛇」は村崎 1976・Pisudski 1998 [1912]・井筒 2006 の資料に基づく新しい樺太アイヌ語の辞典 (手塚梨恵・上野愛理 など 2008: 128) にも記載されている。また、北海道の *oyaw* 「蛇」は Batchelor の辞典にはそのまま (1926: 355)、『Dobrotvorskii』の辞典には *oyav* 「蛇」として (1875: 241)、『Pisudski』の資料にも *ojau* 「蛇」として記載されている (1998 [1912]: 626)。従って、二十世紀以前のアイヌ方言には *oyaw* 「蛇」はもっと広く分布していたに違いない。以上を考慮に入れると、西富山の小矢部川は元来アイヌ語の *oyaw pet* 「蛇の川」であったと思う。この結論を支持する二つの事実を挙げたい。先ず、小矢部川の流れは (特に上流と

下流) かなり曲がりくねっている。それ以外にも、小矢部川には蛇にまつわる次の伝説がある。

「二上山の山頂には『奥の御前(御膳)』とも言われる日吉神社が、また小さな峰の『前の御前(御膳)』には、その名も恐ろしい「悪王子」が祀られている。



図7 二上山から小矢部川を見る



図8 悪王子社から六渡寺・放生津方面をみる。河川の注ぎ込む海は富山湾。

二上の神は山の神であり、水の神。そして、雨や水を人々に恵み与える農耕の神でもあった。しかし、この神様の機嫌をそこねれば、旱魃や洪水、天変地異が人々を襲う。人々は一生懸命に働き、それと同じくらい一生懸命に二上の神をもてなさなければならなかった。つまり一ヶ月に五人もの若い娘を神に、いけにえとして捧げるのがしきたりとなっていた。小矢部川の下流、六渡寺から放生津へ向かう道沿いの村の「まないた橋」と呼ばれる大きな石の橋に、娘をのせた輿を置き去りにすると、どこからともなく高貴な香が辺り一面に漂い始め不思議な音色が聞こえたかと思うと、突風が二上山から吹き降ろし娘を輿もろとも巻き上げ連れ去ってしまうのだった。娘と親は為す術もなく嘆き悲しむしかなかった。

そのころ都には藤原秀郷という一人の武将がいた。別名を倭藤太たわらのとうたと言い、平将門を討ち、琵琶湖の龍を退治したという強い若武者であった。藤太は時の帝に遣わされて遠くこの地にやって来た。二上の神が人々を嘆き悲しませているために「退治せよ」との命を受けていた。藤太は娘の着物を借りると身替りとなって輿に乗り込み、まないた橋へと向かった。一陣の風は、輿もろとも藤太を二上山へと運んだ。藤太は、悪王子とにらみあうこと三日三晩。藤太のすさまじい眼力に負けた悪王子はついに本身を表した。それは二上山を七回り半もするほどの巨大な蛇だったのである。藤太は、

ねらいを定めるとハッシ！ハッシ！と得意の弓矢を幾重に撃ち放った。しかし、大蛇はこれをもろともせず襲い掛かり藤太をぐるぐる巻きにして絞め殺そうとする。はげしい戦いは七日七夜も続いた。ついに退治された大蛇からは、堰を切ったようにドップンドップンと脈打って血が流れ出し、その真つ赤な血は火よりも熱く煮えたぎり、二上山の木や土を焼き焦がして流れ落ちた。この大蛇の血の流れたあとが今の登山道となった。大蛇の姿をした恐ろしい神は、前の御前の祠に「悪王子」として封じ込められ、これを見張るようにして山頂の奥の御前には倭藤太が祀られているという。」(<http://www.murocho.com/aji/kojyou/kojyou11.html>)



図9 宇奈月町の櫛平（けやきだいら）の黒部川（著者の写真）

黒部川

富山県の東部の黒部川は黒部峡谷を流れ、富山湾に注ぐ。小矢部川と同様に、奈良時代の記録はないが、鎌倉時代または南北朝時代に成立した『源平盛衰記』に初めてその名を現す（坂井 1979: 327）。

「部」/be/ は上述の通りである。小矢部の「部」/be/ と同様、「黒部」の「部」/be/ もアイヌ語の *pet* 「川」の借用語であるに違いない。勿論、「黒部」の「黒」は日本語の「黒い」として解釈できる。この場合「黒部」は日本語・アイヌ語の混成語となる。その可能性は否定できないし、混成語が存在しないわけではないが、地名には比較的少ない。では、別の可能性を考えてみよう。

写真でも分かるように、黒部川は本当に「黒い」とは言えないが、日本で一番狭い谷である黒部峡谷に流れる黒部川には日の光があまり当たらない。「黒い」というよりは「暗い」という印象を受ける。アイヌ語では「黒い」と「暗い」は殆どの場合同じ言葉の *kúme* で表すが、現代の諸方言では「暗い」は通常 *sirkune* である (*si* は「天気」)。アイヌ語 *kúme* は先にも指摘したように、アイヌ祖語 **kur-ine* に遡る (*ne* は前述の例と同様アイヌ語の

繫辞である)。いうまでもなく、日本語の「黒い」「暗い」とアイヌ祖語 *kur-ne 「黒い」「暗い」が単なる偶然ではないだろうということは昔から注目されていた(服部 1964: 27-28)。服部氏はこれについて「借用関係の蓋然性も考慮に入れなければならないけれども、「…」親族関係に起因する類似である蓋然性も十分考慮に入れておかなければならない」との考えを示されたが、ここで言う借用関係は日本語からアイヌ語への借用方向であり、それが一般的見地でもある。しかし、問題点がないとはいえない。先ず、日本語の「黒い」と「暗い」は語源的に別々な言葉であった可能性がある事が挙げられる。第二音節の母音の違いだけでなく、アクセントの違いもある。「黒い」は日本語・中古日本語・中世京都語においては低形式のアクセントで、「暗い」は高形式のアクセントである(Martin 1987: 823, 833)。首里方言では、kurusai 「黒い」は短母音を持つているため日本語では有声破裂音 *g- で始まる *guro であるが、「暗い」の祖形は *kura である (Yovin 2008a: 155-56)。従って、アイヌ祖語 *kur-ne 「黒い」「暗い」は日本語 *guro 「黒い」と日本語 *kura 「黒い」「暗い」の両方と同時に関係を持たないことは明らかになる。アイヌ語の全ての方言で語頭に頻繁に現れる h- はアイヌ祖語の *g- に遡る (Yovin 1993: 25-29) という私の仮説が正しければ、アイヌ祖語 *kur-ne は日本語 *guro 「黒い」に何の関係もない事になるが、日本語の *kura 「暗い」とは関係がある可能性はある。しかし、より説得

力がある解釈の方法があると思う。アイヌ祖語 *kur-ne 「黒い」「暗い」は確かにアイヌ語の kūr 「影」の派生語であるため、アイヌ語の kūr 「影」と日本祖語の *kura 「暗い」の関係も考えられるのである。多くのアイヌ方言には音節末の /r/ の後に音韻的でなく、音声的な [u] が聞こえる。この点を考慮すると、「黒部」はおそらく [kuru-bet] と発音されたアイヌ語の kur pet 「影の川」だったと思われる。その kur pet [kuru-bet] 「影の川」に「黒部」が当て字として使われ、当て字の影響で [kuru-be] は [kurobe] 「黒部」になってしまったのだろう。

〈普通名詞・人名〉

これまで地名について見てきたが、地名だけに基づいた証拠は比較的弱く、東北以南でアイヌ語が話されたことを示すには、他の証拠も必要である。それらの証拠の一部として主に『万葉集』の東国歌と防人歌に見られる若干の特別な言葉を取り挙げ、それらの語源がアイヌ語に遡るということを示したいと思う。

思太々之太 / si¹da / 「時」

思太々之太 / si¹da / 「時」という言葉は『萬葉集』の第十四卷（東国歌）に七回と『萬葉集』の第二十卷の防人歌に二回出てくるが、上代中央日本語には見られない。『萬葉集』の中に現れる思太々之太 / si¹da / 「時」の例の全てを以下に纏める。

萬一四・三三六三（相模国の歌）

和我世古乎 夜麻登敝夜利弓 麻都之太須 安思我良夜麻乃 須疑乃木能末可
わがせこを やまとへやりて まつしだす あしがらやまの すぎのこのまか
我が背子を 大和へ遣りて 待つ時^{しど}す 足柄山の 杉の木の間か

萬一四・三四六一（国未詳）

安是登伊敝可 佐宿尔安波奈久尔 真日久礼弓 与比奈波許奈尔 安家奴思太久流
あぜといへか さねにあはなくに まひくれて よひなはこなに あけのしだくる
あぜと言へか さ寝に逢はなくに ま日暮れて 夕なは来なに 明けの時^{しど}来る

萬一四・三四七八（国未詳）

等保斯等布 故奈乃思良祢尔 阿抱思太毛 安波乃敏思太毛 奈尔己曾与佐礼
とほしとふ こなのしらねに あほしだも あはのへしだも なにこそよされ
遠しとふ 故奈の白嶺に 逢ほ時しだも 逢はのへ時しだも 汝にこそ寄され

萬一四・三五一五（国未詳）

阿我於毛乃 和須礼牟之太波 久尔波布利 祢尔多都久毛乎 見都追之努波西
あがおもの わすれむしだは くにはふり ねにたつくもを みつつしのはせ
我が面の 忘れむ時しだは 国溢り 嶺に立つ雲を 見つつ偲はせ

萬一四・三五二〇（国未詳）

於毛可多能 和須礼牟之太波 於抱野呂尔 多奈婢久君母乎 見都追思努波牟
おもかたの わすれむしだは おほのろに たなびくくもを みつつしのはむ
面形の 忘れむ時しだは 大野ろに たなびく雲を 見つつ偲はむ

萬一四・三五三三（国未詳）

比登乃兒能 可奈思家之太波 波麻渚杼里 安奈由牟古麻能 乎之家口母奈思
ひとのこの かなしけしだは はますどり あなゆむこまの をしけくもなし
人の児の かなしけ時しだは 浜渚鳥 足悩む駒の 惜しけくもなし

萬二〇・四三六七（常陸国ひたちの歌）

阿我母互能 和須例母之太波 都久波尼乎 布利佐氣美都々 伊母波之奴波尼
あがもての わすれもしだは つくはねを ふりさけみつつ いもはしぬはね
我が面の 忘れも時しだは 筑波嶺を 振り放け見つつ 妹は偲はね

右一首茨城郡占部小龍

右の一首、茨城郡の占部小龍

萬二〇・四四〇七（上野国かみつけの歌）

比奈久母理 宇須比乃佐可乎 古延志太尔 伊毛賀古比之久 和須良延奴加母
ひなくもり うすひのさかを こえしだに いもがこひしく わすらえぬかも
ひな曇り 碓氷の坂を 越え時しだに 妹が恋ひしく 忘れえぬかも

右一首他田部子磐前二月廿三日上野國防人部領使大目正六位下上毛野君駿河進歌數十二首

但拙劣歌者不取載之

右の一首、他田部子磐前二月二十三日に上野国防人部領使大目正六位下上毛野君駿河が進る歌の数十二首。但し、拙劣の歌は取り載せず。

先にも言及したように、思太く之太 /si^hda/ 「時」は上代中央日本語で書かれた萬葉集の部分には現れない。上代東国日本語には思太く之太 /si^hda/ 「時」だけでなく、登伎く等伎く登吉 /okki/ 「時」も出てくるが、/si^hda/ と /okki/ を文法上の観点から見ると、使い方に違いがある。/okki/ は自由名詞で、殆どの場合自立して出るか他の名詞の後に出ており、動詞の連体形の後に出る例は一度しかない。それとは反対に、/si^hda/ は動詞と形容詞の連体形の後にはか出てこない。

アイヌ語には動詞に続く hi 「時」という不自由名詞があり、殆どの場合、所格の助詞 ta を伴っている。この hi-ta の機能は上代東国日本語には思太く之太 /si^hda/ 「時」と全く同じである。つまり、動詞の後にはか出ないのである。たとえば、

sirpopke hi-ta ku-sinot-rusuy

暖かい 時・所格 一人称・遊・願望

暖かい時に遊びたいな (中川・中本 1997: 38)

kami ka ku-pewre **hi-ta** yuk ka ku-koyki kamuy ka ku-koyki

わしも 一人称・若い **時・所格** 鹿も 一人称・捕る 熊も 一人称・捕る

わしも若い**時**に鹿も捕った。熊も捕った (中川・中本 1997: 58)

kuruma k-o-wa Sapporo-or-un k-arpa **hi-ta** ka en-etok-ta ise-po ru tomotuye ruwe ne

車 一人称・乗る・非終形 札幌・場所・方向格 一人称・行く(単数) **時・所格** 私

・前・所格 も 兎 道 横切る 名詞化詞 繫辞

車に乗って札幌へ行った**時**にも、私の前で兎が道を横切っていったわ (中川・中本 1997: 112)

アイヌ語の *hi-ta* は音声的には /hiDa/ ~ /hidə/ である。 *hi- χ -si-* という変化は先にも言及したように、日本語にだけでなく、近隣の諸言語にも頻繁に見られる。上代東国日本語にも上代中央日本語のように、単なる有声破裂音 /b/, /d/, /g/ がなく、無声破裂音 /p/, /t/, /k/ と鼻音有破裂音 /^mb/, /^md/, /^mg/ しかなかった。従って、アイヌ語の [D] ~ [d] が上代東国日本語に /^md/ として借用されたのは自然であろう。また、アイヌ語の *hi-ta* 「時」は二つの形態素からなっていると説明できるが、上代東国日本語の思太く之太 /si^mda/ 「時」は日本語

では分析不可能なので、借用の方向は確かに「アイヌ語から上代東国日本語へ」である。残念ながら、思太く之太 /si'da/ 「時」が見られる『萬葉集』の東国歌の大部分は「国未詳」であるが、一首だけ(萬一四・三三六三)は相模国の歌とある。また、思太く之太 /si'da/ 「時」が使われている『萬葉集』の防人歌は二首しかないが、詠み手の出身地は常陸国と上野国である。従って、昔は相模国、常陸国と上野国かみつけで囲まれる三角形の領土にはアイヌ語は分布していたことがわかる。

福田良輔氏は、志太 /si'da/ 「時」が『萬葉集』の東国歌と防人歌だけではなく、肥前風土記歌謡にも見られるため、上代東国日本語の特別な言葉ではなく、上代中央日本語と「純粹に語彙関係にある」(福田 1965: 426)との考えを示されている。しかし、肥前国は上代中央日本語が話されていた大和の地方ではなく、遠い筑紫の西北にある地域である。更に、『萬葉集』の東国歌・防人歌と肥前風土記歌謡に出る思太く之太く志太 /si'da/ 「時」が本当に上代中央日本語と純粹に語彙関係にあったとするならば、なぜこの言葉は上代中央日本語で書かれてある文献に一度もすがたを現さないのかが問題である。特に、上代中央日本語で書かれてある文献は肥前風土記歌謡はもちろん、上代東国日本語で書かれてある文献のおよそ四十倍の量があるため、思太く之太く志太 /si'da/ 「時」が本当に上代中央日本語の言葉であれば、現れない理由が説明できない。いずれにしても、志太 /si'da/ 「時」が

出てくる肥前国の北と西北にある松浦郡の肥前風土記歌謡を見てみよう。

志努波羅能 意登比賣能古素 佐比登由母 爲禰弓牟志太夜 伊幣爾久太佐牟
しのはらの おとひめのこそ さひとゆも めねてむしだや いへにくださむ
篠原しのはらの弟姫おとひめの子そ さ一夜ひとゆも 率寝あねてむ時しだや 家いへに下くださむ (風歌謡 一一)⁹

この歌が完璧な上代中央日本語で書かれていないことは一目瞭然である。この判断材料となるのは、第一に、この歌に見られる *yu* 「夜」は上代中央日本語では *yo* であること。第二に、上代中央日本語の係助詞 *so* ~ *no* は「素」/so/ と書かれてあること。第三に、上代中央日本語では「さ」という接頭語は数詞の前には現れない (Vovin 2005b: 82-89) こと。第四に、上代中央日本語には「くだす」という動詞の信頼できる音声表記が見られないということ。以上四点に上代中央日本語の文献には見られない志太 /si^hda/ 「時」が使われている事実を考え合わせると、この歌はやはり上代中央日本語ではなく、上代肥前国の方言で書かれていることが明らかになるだろう。

よって、私は、福田説とは異なり、肥前風土記歌謡に出てくる志太 /si^hda/ 「時」は『萬葉集』の東国歌と防人歌に見られる思太く之太 /si^hda/ 「時」と同様、アイヌ語からの借用

語にちがいないと思う。ここで注目せねばならないことは、上代肥前国の方言の志太 /sɪˈda/ 「時」の利用方法が上代東国日本語とアイヌ語と同様、動詞の後に続くという点である。これにより、大昔アイヌ語は東北・関東・中部だけではなく、九州の西北にも分布していたと考える事ができるのである。しかし、肥前風土記歌謡にはその他のアイヌ語の使用例が見られないので、私説を証明するために、もう一つの独立した証拠が必要であろう。では、次にもう一つの証拠を見てみよう。

『肥前風土記』の肥前国の東南にある高来郡の『肥前風土記』の記述には、次のような一節がある。

土齒池 俗言岸爲比遲波

土齒ひぢはの池いけ 俗くじゆ、岸きしを言いひて比遲波ひぢはと爲なす (肥前風 四三〇・三) ¹⁰

この記述によると、比遲波「岸」は肥前国の方言の言葉に違いない。通常、この「比遲波」は /pɪˈdɪpa/ と読まれる (秋本 1958: 410)。澤潟久孝氏 (1967: 896) も、「遅」は常に /di/ ɸ / /ti/ として上代日本文献に現れる事はないとしている。しかし、これには問題点がないとは言えない。

『萬葉集』には、「遅」は音声表記の万葉仮名として十三回出てくる。その内、十一回は確かに「*hi*」であるが、残りの二回は間違はなく「*hi*」である。その二回の内、一回は上代中央日本語で書かれてある家持の歌の中にあり、もう一回は特別な上代東国日本語の特徴が現れない防人の歌の中にある。それら二首の歌を以下にあげる。

萬一九・四一六一（家持の歌）

言等波奴 木尚春開 秋都氣婆 毛美知遅良久波 常乎奈美許曾

こととはぬ きすらはるさき あきづけば もみちちらくは¹¹ つねをなみこそ

言問はぬ 木すら春咲き 秋付けば 黄葉散らくは 常をなみこそ

萬二〇・四三三三（防人の歌）

伊倍加是波 比ル々々布氣等 和伎母古賀 伊倍其登母遅豆 久流比等母奈之

いへかぜは ひにひにふけど わぎもこが いへごともちて くるひともなし

家風は 日に日に吹けど 我妹子が 家言持ちて 来る人もなし

右一首朝夷郡上丁丸子連大歳

右の一首、朝夷郡の上丁丸子連大歳

また、大野晋氏 (1953: 279) によると、「遲」は『日本書紀』の万葉仮名では常に /di/ ではなく、/hi/ であるとの事である。しかし、森博達氏 (1991: 208, 259) によると、「遲」/hi/ は日本書紀歌謡にしか見られず、日本書紀訓注万葉仮名には全く見られないそうである。更に、日本書紀歌謡に見られる「遲」/ɛ:/ は森博達氏の後期中世中国語に基づいた a 群の万葉仮名に出てくるとの事である。¹² 以下に「遲」/ɛ:/ が出てくる日本書紀歌謡の部分を引用する。

瀬逗佐倍母理 儼岐曾褒遲 喻俱謀 柯尋比謎阿婆例

みづさへもり なきそほちゆくも かげひめあはれ

水さへ盛り 泣き濡ち行くも 影媛あはれ (紀歌 九四)

¹³

古事記歌謡では「遲」は /di/ を表すが、『古事記』に「大穴牟遲」と表記されている神名 (記上一二五オ九、一二五ウ六、二六オ二、二六ウ九、二七オ三・五、二九ウ九) は『風土記』では「大穴六道」/OPO ANA muti/ (土佐風逸四九九・九) 或いは「大穴持」/OPO ANA moti/ (出雲風一〇二・五、一〇六・一〇・一二、一〇八・二・一二、一一〇・一・一二、六・四・七、一六六・一二、一六八・六、一八〇・八・一二、一八二・一、一九〇・一四、

二〇二：一・八・一〇、二〇四：一・三、二〇八：四、二一六：一・五、二二〇：一、二二四：一四、二二六：二・六、二三六：五・七・九、二三八：九、二四二：五、伊豫風逸四九五：六)、『萬葉集』では於保奈牟知 /*opo na nuti/* (萬一八・四一〇六)、そして『日本書紀』では於褒姍娜武智 /*opo ana nuti/* (紀一・一四)¹⁴と表記されているので、『古事記』の「大穴牟遲」も **OPo ANA nu^hdi* ではなく、/*OPo ANA nuti/* と読まねばならない。そして、万葉仮名の「遲」は鼻音有声子音がある /*di/* の音節のみならず、無声子音がある /*ɬi/* の音節も表す事ができる。

従って、『肥前風土記』の「比遲波」を /*pi^hdipa/* ではなく /*pitipa/* と読む可能性もあるわけである。『肥前風土記』の /*pitipa/* 「岸」という言葉は、他の上代日本語文献にも、中古日本語文献にも、現代日本語にも見られない。しかし、アイヌ語には *pépa* ~ *péca* 「岸」という言葉がある。たとえば、幌別方言 *pépa*、帯広方言 *péca*、美幌方言 *péca* 「岸」(服部 1964: 216)、旭川方言 *péca* 「岸」(Idutsu 2004: 256)、¹⁵ 釧路方言 *péca* 「岸」(川岸) (山本 2004: 199)、樺太方言 *pécará* 「寄せ波が碎ける海岸の部分」(Dobrotvorskii 1875: 251)、千島(鳥居竜蔵資料) *pet chai imaku* 「岸」(服部 1964: 216)、千島(ヴォズネセンスキイ資料) *pecar* 「川岸」(Vovin 1993: 202) などがそうである。アイヌ語の *pépa* ~ *péca* 「岸」は、*pét* 「川」と *pá* ~ *cá* 「縁」の合成語である。アイヌ語の *pa* ~ *cá* 「縁」は、アイヌ祖

語 *pya HH に遡る。アイヌ語の pépa ~ péca 「岸」は二つの形態素からなる合成語であるが、『肥前風土記』の /pitpa/ 「岸」は形態論的に分析できない。また、アイヌ語の pépa ~ péca 「岸」は北海道の方言にも、樺太の方言にも、千島の方言にも見られ、広く分布しているが、/pitpa/ 「岸」は『肥前風土記』にしか見られない。従って、借用方向はアイヌ語から上代肥前国日本語へしかありえないだろう。最後に、日琉祖語の *e と *o は琉球祖語では常に保存され、上代東国日本語では多くの場合保存され、上代中央日本語ではある条件下以外において殆どの場合 /i/ と /u/ になった(服部四郎 1976, 1978-79)(早田 1998)(Serafim 1999a, 1999b, 2008)(日野 2003)(Miyake 2003b)(Frellesvig & Whitman 2004, 2008)。上に引用した『肥前風土記』の風歌謡一一に見られる *yu* 「夜」を上代中央日本語 *yô* 「夜」(〈日琉祖語 *yo) と比較すると、上代肥前国日本語では日本祖語 *o < /u/ の変化が上代中央日本語より進んでいたことが分かる。*e < /i/ の変化を示すデータが風歌謡一一では見られないので、肥前風土記逸文にある風歌謡一九を見てみよう。

阿羅礼布縷 耆資麼加多塏塏 嵯峨紫彌苦 區縵刀理我泥底 伊母我堤塏刀縷
 あられふる きしまがたけを さがしみと くさとりかねて いもがてをとる
 霰降る きしまが嶽を 嶮しみと 草取りかねて 妹が手を取る(風歌謡一九)

この歌も前に挙げた風歌謡一一同様、完璧な上代中央日本語で書かれていないことは明らかである。たとえば、Bentley 氏が示したように、上代中央日本語には中古日本語と現代日本語の *to-* 「取る」に対応する完全に異なる二つの動詞があった。その一つは、甲類の母音 *o* を含んでいた上代中央日本語 *to-* 「持っている、支える、採る」であり、もう一つは、乙類の母音 *o* を含んでいた上代中央日本語 *to-* 「取る、捕る、つかむ」であった (Bentley 1999)。しかし、風歌謡一九は乙類の母音 *o* を含んでいた上代中央日本語 *to-* 「取る、捕る、つかむ」を上代中央日本語 *to-* 「持っている、支える、採る」として綴っている。この現象と、前に言及した風歌謡一一で乙類の母音 *o* を含む上代中央日本語の係助詞 *so* ~ *zo* が甲類の母音 *o* を含む *so* として誤って表記されていたことを考慮すると、肥前上代日本語には甲類の母音 *o* と乙類の母音 *o* の区別はすでに消滅していた事が明らかになる。

ではここで風歌謡一九に見られるある言葉に着目したいと思う。その言葉とは「きしま」であるが、これは島の名前ではなく、海から大分離れた孤立した（山脈に属しない）肥前国の杵島郡の山の名前である。しかし、風歌謡一九が入っている『肥前風土記』の逸文にも、『肥前風土記』の本文にも「きしま」は「杵島」として書かれている（肥前風四〇二

…六、肥前風逸五一五・一一）。風歌謡一九に見られる「者資麼」と『肥前風土記』の本
文・逸文に見られる「杵島」を比べると、「者資麼」は音読みに基づく書き方で、「杵島」
は訓読みに基づく書き方であることが分かる。日琉祖語 *sema 「島」〈百済語 sema、中
世韓国語 :syem 「島」〉は上代中央日本語同様、肥前上代日本語においても sima になっ
たため、上代肥前国日本語にも *e<ni という変化がすでに起こっていたという結論を出
す事ができる。従って、『肥前風土記』の /pitupa/ 「岸」は *petepa ~ *petupa 「岸」(アイ
又祖語 *pet-pyaa) に遡れる可能性が高々と思う。

また、もし『肥前風土記』の「比遲波」を /pi^hdipa/ と読むと、この論文の初めに言及
したアイ又語の *asikari が二次的な鼻音化で asi^hgari になってしまった上代東国日本語と
同様、*petepa ~ *petupa 「岸」が二次的な鼻音化で /pi^hdipa/ になった可能性もあると思う。

手児ゝ豆胡ゝ手児名ゝ手児奈ゝ豆胡奈「愛しい女?・恋人?・少女?・固有名詞?」

手児ゝ豆胡ゝ手児名ゝ手児奈ゝ豆胡奈という言葉も意味が確かではない(澤瀉 1967:
482) が、固有名詞にしても、元来の意味は下で解釈する。この言葉は上代中央日本語で
書いてある『萬葉集』の歌にも東国の歌にも現れるが、下に引用する萬三・四三一の題を

国	イ)「胡」/h oŋ/	イ)「胡」/kə/
相模	萬一四・三三六五、萬一四・三三七二	;
下総	萬一四・三三八四	;
上野	萬一四・三四〇三、萬一四・三四〇三	;
武蔵	萬二〇・四四一七	;
国未詳	萬一四・三四五九、萬一四、三五三四、萬一四、三五三七	萬一四、三五四一
合計	9	1

考慮すると、上代東国日本語の言葉に違いない。また、萬一四・三四八五と萬一四・三五四〇以外では、手児く互胡く手児名く手児奈く互胡奈は常に「麻末の互胡く真間の手児名く麻末乃互胡奈」「埴科の石井の手児」或いは「東道の手児」として出てくる。「真間」という地名は現代の千葉県市川市真間の付近の地であり、「埴科」という地名は現代の長野県埴科郡の地であり、「東道」は勿論「東へ行く道」「東を通る道」「東の地方」である(中西 1985: 418, 476, 485)。こずれにしても、関東と中部の地名である事が分かる。そして、この言葉の読み方であるが、「てこくてこな」と読む学者も、「てこくてこな」と

読む学者もいる。ただし、「てこくてこな」の音声表記は二回しかないが、その二回とも二番目の音節を表記するのに「胡」を使っている。『萬葉集』には音読される「胡」は二十七回現れる。その二十七回の内、「胡」は二十四回は明らかに「*ko*」/*ko*、二回は確かに「*ko*」/*ko*である。残りの一回は正確に判断できないが、おそらく「*ko*」/*ko*であろう。東国の歌と防人歌には「胡」は十回出る。国別にみる「*ko*」〜「*ko*」の統計は表の通りである。

上の統計に基づき判断すると、「手児〜豆胡〜手児名〜手児奈〜豆胡奈」は「てこくてこな」ではなく、「てこくてこな」と読んでいいだろう。

また、「てこ」と「てこな」の違いを考えると、「てこな」の「な」は間違いなく上代中央日本語の愛称接尾語「ら」に対応する上代東国日本語の愛称接尾語「な」であること (Vovin 2005b: 212-13) は明確である。従って、「手児〜豆胡〜手児名〜手児奈〜豆胡奈」の語幹は確かに「てこ」であるが、その語源を説明する前に、『萬葉集』に出てくる「手児〜豆胡〜手児名〜手児奈〜豆胡奈」の例を全部見てみよう。

萬三・四三一

過勝鹿真間娘子墓時山部宿祢赤人作歌一首并短歌「東俗語云可豆思賀能麻末乃豆胡」勝鹿

の真間の娘子が墓に過る時に、山部宿祢赤人が作る歌一首并せて短歌「東の俗語に云ふ、かづしかのままのてい」]

古昔 有家武人之 倭文幡乃 帶解替而 廬屋立 妻問為家武 勝壯鹿乃 真間之手兒名
之 奥櫛乎 此間登波聞杼 真木葉哉 茂有良武 松之根也 遠久寸 言耳毛 名耳母吾
者 不可忘

いにしへに ありけむひとの しつはたの おびときかへて ふせやたて つまどひしけ
む かづしかの ままのていなが おくつきを こことはきけど まきのはや しげりた
るらむ まつがねや とほくひさしき ことのみも なのみもわれは わすらゆましじ
古に ありけむ人の 倭文機の 帶解き交へて 廬屋建て 妻問ひしけむ 勝鹿の 真間
の手兒名が 奥つ城を こことは聞けど 真木の葉や 茂りたるらむ 松が根や 遠く久
しき 言のみも 名のみも我は 忘らゆましじ

萬三・四三二反歌

吾毛見都 人尔毛将告 勝壯鹿之 間々能手兒名之 奥津城處
われもみつ ひとにもつげむ かづしかの ままのていなが おくつきどころ
我も見つ 人にも告げむ 勝鹿の 真間の手兒名が 奥つ城所

萬三・四三三

勝壯鹿乃 真々乃入江尔 打靡 玉藻莉兼 手兒名志所念

かつしかの ままのいりえに うちなびく たまもかりけむ てごなしおもほゆ

勝鹿の 真間の入江に うちなびく 玉藻刈りけむ 手兒名し思ほゆ

萬九・一八〇七

詠勝鹿真間娘子歌一首并短歌

勝鹿の真間娘子を詠む歌一首并せて短歌

鶏鳴 吾妻乃國尔 古昔尔 有家留事登 至今 不絶言來 勝壯鹿乃 真間乃手兒奈我

麻衣尔 青衿著 直佐麻乎 裳者織服而 髮谷母 搔者不梳 履乎谷 不著雖行 錦綾之

中丹腸有 齋兒毛 妹尔将及哉 望月之 満有面輪二 如花 咲而立有者 夏蟲乃 入

火之如 水門入尔 船己具如久 歸香具札 人乃言時 幾時毛 不生物呼 何為跡敷 身

乎田名知而 浪音乃 驟湊之 奥津城尔 妹之臥勢流 遠代尔 有家類事乎 昨日霜 将

見我其登毛 所念可聞

とりがなく あづまのくにに いにしへに ありけることと いままでに たえずいひける
かつしかの ままのてごなが あさぎぬに あをきくびつけ ひたさをを もにはお

りきて かみだにも かきはげづらず くつをだに はかずゆけども しきあやの なか
につつめる いはひこも いもにしかめや もちづきの たれるおもわに はなのごと
ゑみてたてれば なつむしの ひにいるがごと みなとிரりに ふねこぐごとく ゆきか
ぐれ ひとのいふとき いくばくも いけらしものを なにすとか みをたなしりて な
みのおとの さわくみなとの おくつきに いもがこやせる とほきよに ありけること
を きのおふしも みけむがごとく おもほゆるかも

鶏が鳴く 東の国に 古に ありけることと 今までに 絶えず言ひける 勝鹿の 真間
の**手児名**が 麻衣に 青き衿付け ひたさ麻を 裳には織り着て 髪だにも 搔きは梳ら
ず 沓をだに はかず行けども 錦綾の 中に包める 斎ひ児も 妹に及かめや 望月の
足れる面わに 花のごと 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るがごと 湊入りに 舟漕
ぐごとく 行きかぐれ 人の言ふ時 いくばく 生けらしものを なにすとか 身をたな
知りて 波の音の 騒く湊の 奥つ城に 妹が臥やせる 遠き代に ありけること／昨日
し／見けむがごとくも 思ほゆるかも

萬九・一八〇八反歌

勝壮鹿之 真間之井乎見者 立平之 水檜家武 **手児名**之所念

かつしかの ままのゐをみれば たちならし みづくましけむ てごなしおもほゆ
勝鹿の 真間の井を見れば 立ち平し 水汲ましけむ 手児名し思ほゆ

萬一四・三三八四 (下総国の歌)

可都思加能 麻未能手兒奈乎 麻許登可聞 和礼尔余須等布 麻末乃豆胡奈乎
かづしかの ままのてごなを まことかも われによすとふ ままのてごなを
葛飾の 真間の手児名を 真かも 我に寄すとふ 真間の手児名を

萬一四・三三八五 (下総国の歌)

可豆思賀能 麻萬能手兒奈我 安里之可婆 麻末乃於須比尔 奈美毛登杼呂尔
かづしかの ままのてごなを ありしかば ままのおすひに なみもとどろに
葛飾の 真間の手児名が ありしかば 真間のおすひに 波もとどろに

萬一四・三三九八 (信濃国の歌)

比等未奈乃 許等波多由登毛 波尔思奈能 伊思井乃手兒我 許登奈多延曾祢
ひとみなのこととはたゆとも はにしなの いしゐのてごな ことなたえそね

人皆の 言は絶ゆとも 埴科の 石井の**手児**が 言な絶えそね

萬一四・三四四二（国未詳）

安豆麻治乃 **手児**乃欲妣左賀 古要我祢弓 夜麻尔可祢牟毛 夜杼里波奈之尔
あづまぢの てごのよびさか こえがねて やまにかねむも やどりはなしに
東道の **手児**の呼坂 越えがねて 山にか寝むも 宿りはなしに

萬一四・三四七七（国未詳）

安都麻道乃 **手児**乃欲婢佐可 古要弓伊奈婆 安礼波古非牟奈 能知波安比奴登母
あづまぢの てごのよびさか こえていなば あれはこひむな のちはあひぬとも
東道の **手児**の呼坂 越えて去なば 我は恋ひむな 後は相寝とも

萬一四・三四八五（国未詳）

都流伎多知 身尔素布伊母乎 等里见我祢 哭乎曾奈伎都流 **手児**尔安良奈久尔
つるぎたち みにそふいもを とりみがね ねをそなきつる てごにあらなくに
劍大刀 身に添ふ妹を とりみがね 音をそ泣きつる **手児**にあらなくに

萬一四・三五四〇（国未詳）

左和多里能 手兒 尔伊由伎安比 安可故麻我 安我伎乎波夜美 許等登波受伎奴
さわたりの てごにいゆきあひ あかごまが あがきをはやみ こととはずきぬ
さわたりの 手兒にい行き逢ひ 赤駒が 足搔きを速み 言問はず来ぬ

ここに引用した歌の後半の萬一四・三四四二、一四・三四七七、一四・三四八五、一四・三五四〇を見ると、「てごうてごな」の最も可能性の高い意味は「少女」ではなく、「恋人」であると思う。ここで注意しなければならないのは、二種の音声表記の例である「弓胡」と「弓胡奈」以外、「てご」は音声表記が顕著な東国の歌には常に漢字表記の「手兒」として書かれてある。なぜであろうか。

「手兒」を「手の兒」の省略として日本語で説明できるかもしれないが、とするとおかしい点がある。日本語は、英語やドイツ語のように、「手」と「腕」を区別する。自分の恋人は言うまでもなく、手ではなく、腕で抱くだろう。それに対して、アイヌ語は、ロシア語のように、「手」と「腕」を区別しない。アイヌ語では、「手」と「腕」の両方を *te* と呼んでいる。そして、アイヌ語には、*o*。「入れる、乗せる」という動詞がある。このよ

うに考えると、「手児」はアイヌ語 tek-o[teg-o]「腕に入れる、抱く」と解釈するのがよいと思われる。先にも何度か言及したように、アイヌ語の「-go」は上代日本語の「-go」になる。また、アイヌ語 tek-o[teg-o]「腕に入れる者」、抱く者」は「恋人」の意味と合致する。「手児」が上代東国日本語の言葉であることもこの分析を強く支持すると考えてもいいだろう。

東国の難解な歌

東歌の中には難解な歌が少なくない。次に一つの例を挙げよう。

萬一四・三三八二（上総かみかさ国の歌）

宇麻具多能 祢呂乃佐左葉能 都由思母能 奴礼互和伎奈婆 汝者故布婆曾母
うまぐたの ねろのささばの つゆしもの ぬれてわきなば なはこふばそも
馬來田の 嶺ろの笹葉の 露霜の 濡れて我來なば 汝は恋ふばそも

この歌では特に最後の「こふばそも」が問題になる。色々な解釈の仕方が考えられるが、

主な説を幾つか以下に引用する。

高木市之助・五味智英・大野晋の説…

馬来田の 嶺ろの笹葉の 露霜の 濡れてわ来なば 汝は**恋ふばそも**

恋ふば「恋しく思うから」(恋ふればの訛)、そも「であるよ」と解釈する(高木・五味・大野 1960: 417)。

小島憲之・木下正俊・佐竹昭広の説…

「恋ふばそも」未詳である(小島・木下・佐竹 1973: 456)。

中西進の説…

「恋ふば」未詳。「恋ヒム」の訛りか。「そ」は係助詞。「も」は詠嘆(中西 1981: 250)。

澤潟久孝の説…

馬来田の 嶺ろの笹葉の 露霜の 濡れて我来なば 汝は**恋ふばそも**

汝は恋ふばそも「そなたは私に恋焦がれることよ」と解釈する(澤潟 1983: 62-63)。

水島義治の説：

汝は恋ふばぞも「お前は一人切なく私を恋い慕うことだろうなあ」。「こふば」は「恋ひむ」の訛り（水島 1986: 105-07）。

伊藤博の説：

「恋ふばぞも」未詳。文脈から推して「恋ひむぞも」の意と見られる。「ぞも」は強調、詠嘆の終助詞（伊藤 1997: 327）。

佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之の説：

結句「こふばぞも」意味不明（佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之 2002: 321）。

佐竹昭広氏・山田英雄氏・工藤力男氏・大谷雅夫氏・山崎福之氏の説以外の解釈には、音韻学と文法上の観点から見ると、問題点があると思う。先ず、「恋ひむ」 /kōpimʷ/ < 「恋ふば」 /kōpu^hba/ の変化は上代東国日本語の音韻学上で不可能である。上代東国日本語には /-r-/ の脱落もないため、「恋ふば」 /kōpu^hba/ を「恋ふれば」として説明する事はでき

ない。上代中央日本語「恋ひば」/kôpi^mba/ に対応する上代東国日本語「恋ふば」/kôpu^mba/ は想像できるが、この歌の文脈を見ると、あまり意味をなさない。意味を無視し、「恋ふば」/kôpu^mba/ を動詞の条件形として考えても、文法上の問題が残る。すなわち、動詞の未然形+「ば」の後に続く係助詞「そぞ」または係助詞「そ」と終助詞「も」との結合である「そも」が問題なのである。そのような文法例は上代東国日本語にも上代中央日本語にも全く見られない (Vovin 2008b: 1186-87)。

特に解釈が困難である「ばそも」はアイヌ語の *pay somo 「行かない」であると思う。しかし、この解釈には二つの問題点がある。まず、現代アイヌ語の方言ではアイヌ語 payé 「行く」は単数動詞ではなく、複数動詞なのである。にも関わらず、驚くべき事にアイヌ語 payé 「行く」(＜アイヌ祖語 *pay-i (Vovin 1993: 124) は規則的単数動詞の接尾語 -e < *i を伴っている。たとえば、アイヌ語 hopun-i 「立ち上がる、飛ぶ」(単数) / hopun-pa 「立ち上がる、飛ぶ」(複数) / hosip-i 「戻る」(単数) / hosip-pa 「戻る」(複数) / kay-e < *kay-i 「を折る」(単数) / kây-pa 「を折る」(複数) / rew-é < *rew-i 「を曲げる」(単数) / réw-pa 「を曲げる」(複数) などを参考にしてほしい。そして、現代アイヌ語複数動詞 payé 「行く」に対応する単数動詞は北海道の沙流方言と千歳方言では arpa で、他の方言では oman である。いずれも新しい発展の結果であるかもしれない。もう一つ問題点はアイヌ語の否

定助詞 *somo* の位置である。現代アイヌ方言では否定助詞の *somo* は殆ど例外なく動詞の後ではなく、動詞の前に来る。¹⁸しかし、アイヌ語のような SOV の言語において動詞の前に否定助詞が位置するのはおかしい。例外がないとはいえないが（たとえば、中世韓国語も同じである）、非常に珍しい。とは言え、アイヌ祖語では否定助詞の位置が動詞の後であった可能性を完全に否定する事はできない。では、もう一つの説明の方法を見てみよう。上代日本語には打消しの命令の形式「な―動詞の連用形―そ」以外に、打消しは常に動詞の語幹の後に出るため、上代東国日本語の借用語になったアイヌ語の *somo* は日本語のよくな位置に置かれたという可能性もある。

最後に「恋ふばそも」の「恋ふ」に戻ろう。この「こふ」は実際終止形の「恋ふ」ではなく、上代中央日本語の連用形「恋ひ」/ *kōpi* に対応する上代東国日本語の連用形「恋ふ」である。上代中央日本語形容詞「恋ひし」/ *kōpisi* と上代東国日本語「恋ふし」/ *kōpusi*（故布思、萬一四・三四七六）も参照。

上述の点を考慮すると、結句「汝は恋ふばそも」の意味は完全に明らかになる。「お前は「私を」恋い慕って、行かない」となる。

結 論

この論文ではアイヌ語が昔、東北のみならず、関東・中部と西北九州にも分布していた事を示す色々な証拠を挙げた。東北から九州までの分布であるから、当然次のような疑問が生まれるだろう。なぜアイヌ語の名残は関西と中国地方には見られないのだろうか。先ず、アイヌ語らしい地名は関西にも存在すると思うが、この限られた論文中では討論できない。第二に、関西と中国地方は東北・関東・中部と西北九州と比較すると、より長く大和の支配下にあった。従って、関西と中国地方におけるアイヌ語が周囲の地方より早く消えてしまったのは不思議でない。

最後に、本文中で取り挙げた歌と *si^uda* 「時」が示すように、少なくとも八世紀の半ばまで関東地方では日本語・アイヌ語の二言語使用があったと思われる。

上代・中古日本語文献省略

- 出雲風 『出雲風土記』七三三年
伊豫風逸 『伊豫風土記逸文』七三三年
記 『古事記』七二二年
紀 『日本書紀』七二〇年
紀歌 『日本書紀歌謠』七二〇年
古今集 『古今和歌集』九二一年
土佐風逸 『土佐風土記逸文』七三三年
肥前風 『肥前風土記』七三三年
肥前風逸 『肥前風土記逸文』
風歌謠 『風土記歌謠』七三三年
萬 『萬葉集』七五九年以後七八五年以前

*『古事記』は「古事記大成」、『日本書紀』は「国史大系」、それ以外は「日本古典文学大系」に拠った。

参考文献

- 秋本吉郎（校註）1958『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店。
井筒勝信（編）2002『アイヌ語旭川方言コーパスに基づく辞書編纂のための基礎研究』北海道教育大学
教育学部旭川校
井筒勝信（編）2003a『アイヌ語旭川方言辞典草案』北海道教育大学教育学部旭川校
井筒勝信（編）2003b『アイヌ語旭川方言コーパスに基づく文法書編纂のための基礎研究』北海道教育大
学教育学部旭川校

- 井筒勝信 (編) 2004-2005『アイヌ語旭川方言資料集成』二冊(北海道教育大学教育学部旭川校 2004-2005)
- 井筒勝信 2006『IYAY-PAKASNU: アイヌ語の学習と教育のために』北海道教育大学旭川校
- 井筒勝信・手塚順孝 (共著) 2006『基礎アイヌ語』サツポロ堂書店
- 伊藤博 1997『萬葉集釈注』七集英社。
- 上村幸雄 2002「言語、その過去、現在、未来——日本列島の言語を中心に(その1)」『国文学解釈と鑑賞』第六七巻七号: 六一—二一頁
- 上村幸雄 2003a「言語、その過去、現在、未来——日本列島の言語を中心に(その2)」『国文学解釈と鑑賞』第六八巻一号: 一三—二八頁
- 上村幸雄 2003b「言語、その過去、現在、未来——日本列島の言語を中心に(その3)」『国文学解釈と鑑賞』第六八巻七号: 六一—三三頁
- 上村幸雄 2007「日本語・琉球語とアイヌ・エミシ系言語との関係」『沖縄言語研究センター資料』第一六五号: 一一—一五頁
- 上村幸雄 2008「言語、その過去、現在、未来——日本列島の言語を中心に(その4)」『国文学解釈と鑑賞』第七三巻一号: 一九六—二二一頁
- 太田満 2005『旭川アイヌ語辞典』アイヌ語研究会
- 大野晋 1953『上代仮名遣いの研究』岩波書店
- 澤潟久孝 (代表) 1967『時代別国語大辞典・上代編』三省堂
- 澤潟久孝 (編) 1983『萬葉集注釈』第十四巻 中央公論社
- 菅野茂 2002『菅野茂のアイヌ語辞典』増補版 三省堂
- 金田一京助 2004『古代蝦夷(えみし)とアイヌ』工藤雅樹 (編) 平凡社
- 黒板勝美 (編) 1966『日本書紀』新訂増補国史大系 1上・下 吉川弘文館

- 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 1971-75 『萬葉集』日本古典文学全集 2・5 小学館
- 佐伯梅友 1959 『奈良時代の国語』三省堂
- 坂井誠一（代表） 1979 『角川日本地名大辞典』第十六卷・富山県 角川書店
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之 2002 『萬葉集』三 新日本古典文学大系 3 岩波書店
- 高木市之助・五味智英・大野晋（共編） 1957-62 『萬葉集』日本古典文学大系 3・7 岩波書店
- 高木市之助・富山民蔵（共編） 1974 「古事記総索引本文編・総索引編」『古事記大成』第7・8巻 平凡社
- 高瀬重雄（監修） 1994 『富山県の地名』『日本歴史地名体系』16 平凡社
- 田村すず子 1996 『沙流方言アイヌ語辞典』草風館
- 知里真志保 1956a 『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター
- 知里真志保 1956b 『アイヌ語入門』北海道出版企画センター
- 知里真志保 1976 『分類アイヌ語辞典・植物編・動物編』知里真志保著作集 別巻Ⅰ 平凡社
- 手塚梨恵・上野愛理・倉重裕美・中田恭平・山下真悟・坂田亜里沙（共編） 2008 『サハリンアイヌ語辞典』北海道教育大学旭川校 談話・語用論ゼミ
- 土橋寛（編） 1957 「風土記歌謡」土橋寛・小西甚一（共編）『古代歌謡集』日本古典文学大系 3 岩波書店
- 中川裕 1995 『千歳方言アイヌ語辞典』草風館
- 中川裕・中本ムツ子 1997 『エクスプレスアイヌ語』白水社
- 中西進 1981 『万葉集』全訳注原文付（三）講談社
- 中西進 1985 『万葉集事典』講談社
- 西鶴定嘉 1996 『東北六県アイヌ語地名辞典』国書刊行会
- 服部四郎（編） 1964 『アイヌ語方言辞典』岩波書店
- 服部四郎 1976 「琉球方言と本土方言」『沖繩学の黎明 伊波普猷生誕百年記念誌』伊波普猷生誕百年記

念会(編) 七一五五頁

服部四郎 1978-79 「日本語について」『言語』連載一—二二

早田輝洋 1998 「上代日本語の音節構造とオ列甲乙の別」『音声研究』二二:二二五—二二三頁

日野資成 2003 「日本語の母音体系——上代東国方言資料による再構」『日本語系統論の現在 *Perspectives on the Origins of the Japanese language*』長田俊樹、アレキサンダー・ホビン(ヴォヴィン) 共編 京都

・国際日本文化研究センター 一八七—二〇六頁

福田良輔 1965 『奈良時代東国方言の研究』風間書院

水島義治 1986 『萬葉集全註』第十四卷 有斐閣

森博達 1991 『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店

山本多助 2004 『アイヌ語釧路方言語彙』切替英雄(監修) 釧路アイヌ語の会

Batchelor, John 1926. *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. 3rd edition. Tokyo and London: Kyoubunkan

Bentley, John 1999. "The verb TORU in Old Japanese." *Journal of East Asian Linguistics* 8: 131-46.

Dobrovorskiĭ, Mikhail M. 1875. *Ainsko-russkii slovar* (『アイヌ語・ロシア語辞典』)。Kazan': Kazan' University.

Frellesvig, Bjarke & John Whitman 2004. "The vowels of Proto-Japanese: 'Japanese Language and Literature 38: 281-99."

Frellesvig, Bjarke & John Whitman 2008. "Evidence for seven vowels in proto-Japanese." In: *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Bjarke Frellesvig, John Whitman (eds.). Amsterdam: John Benjamins: 2008, pp. 15-41.

Hamano, Shoko 2000. "Voicing of obstruents in Old Japanese: evidence from the sound symbolic stratum." *Journal of East Asian Linguistics* 9.2: 207-25.

Idtsum, Katsunobu 2004. *The Ainu Language: A Linguistic Introduction*. Asahikawa, Hokkaido : Hokkaido

- University of Education.
- Martin, Samuel E. 1987. *The Japanese Language Through Time*. New Haven & London: Yale University Press.
- Miyake, Marc H. 2003a. *Old Japanese: a phonetic reconstruction*. London & New York: Routledge/Curzon.
- Miyake, Marc H. 2003b. "Phonological evidence for *e and *o in Pre-Old Japanese." *Diachronica* 20.1: 83-137.
- Pisudski, Bronisław 1998 [1912]. *The Collected Works of Bronisław Pisudski*. Vol. 2: Ainu Language and Folklore Materials. Alfred Majewicz (ed.). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Serafim, Leon A. 1999a. "Why Proto-Japonic had at least six, not four vowels." Presentation given at the University of Hawaii at Mānoa Linguistics Department Tuesday Seminar.
- Serafim, Leon 1999b. "Reflexes of Proto-Koreo-Japonic Mid Vowels in Japonic and Korean." Paper presented at the International Conference on Historical Linguistics XIV (Copenhagen), Workshop on Korean-Japanese Comparative Linguistics.
- Serafim, Leon A. 2008. "The uses of Ryukyuan in understanding Japanese language history." In: *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Bjarke Frellesvig, John Whitman (eds.). Amsterdam: John Benjamins: 2008, pp. 79-99.
- Shimabukuro, Moriyō 2007. *The Accentual History of the Japanese and Ryukyuan Languages - A Reconstruction*. Folkestone: Global Oriental.
- Unger, J. Marshall 2003. "Alternations of *m* and *b* in Early Middle Japanese: The Deeper Significance of the Sound-Symbolism Stratum." Paper presented at International Conference on Historical Linguistics XIV (Copenhagen), Workshop on Korean-Japanese Comparative Linguistics.
- Unger, J. Marshall 2008. "Early Japanese lexical strata and the allophones of /g/." In: *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Bjarke Frellesvig, John Whitman (eds.). Amsterdam: John Benjamins: 2008, pp. 43-53.
- Vovin, Alexander 1993. *A Reconstruction of Proto-Ainu*. Leiden: E. J. Brill.

- Vovin, Alexander 2005a. "The End of the Altaic Controversy," *Central Asiatic Journal* 49.1: 71-132.
- Vovin, Alexander 2005b. *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese*. part 1: *Introduction, Writing System and Phonology*. *Lexicon, Nominals*. XIX+412 pp., Folkestone: Global Oriental.
- Vovin, Alexander 2008a. "Proto-Japonic beyond the accent system." In: *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Bjarke Frellesvig, John Whitman (eds.). Amsterdam: John Benjamins: 2008, pp. 141-56.
- Vovin, Alexander 2008b (forthcoming). *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese*. part 2: *Adjectives, Verbs, Adverbs, Conjunctions, Particles, Postpositions*. XXX+988 pp., Folkestone: Global Oriental.

注

- 1 北海道教育大学旭川校の井筒勝信先生はアイヌ語への翻訳をしてくださいました。感謝申し上げます。
- 2 標準語でも /h/ はよく /s/ と発音される。たとえば /hito/ 「人」 < [sito]。その音声変化は多くの日本方言だけでなく、韓国語の方言にもツングース諸言語にもよく見られる。また、上代日本語には /h/ という音素がなかったことも忘れてはならない。
- 3 ところで、この反映は母音の間に出る上代日本語の無声破裂音 /p/, /t/, /k/ は有声破裂音 [b], [d], [g] として発音されたという Hamano-Unger の仮説 (Hamano 2000) (Unger 2003, 2005) に対するものとしての反証になる。Hamano-Unger の仮説への他の反証については Vovin (2005b: 37-38) を参照。
- 4 『源平盛衰記』は『源平盛衰記』とも知られている。
- 5 アイヌ語 oyaw kina 「はりん」は Batchelor の辞典にも oyau kina として記録されている (1926: 355) ので、一九世紀の北海道方言にもあったらしい。
- 6 この伝説をインターネットで探し出してくれた妻の石崎 (ヴォヴィン) 賛美に感謝を表す。

- 7 『萬葉集』の第十四卷末に防人歌が十二首も集められてあるが、その内には思太く之太 */sunda/* 「時」という言葉は見られない。
- 8 あはの */ap-an-op-ye/* 「逢わなかつたりする」に見られる上代東国日本語の *ə* は（甲類の *ye* とし て書かれている）上代東国日本語の特別な連体形であるらしい。後に引用した萬二〇・四四〇七のこ え */ōy-e/* も参照。西洋の言語学者の大部分は上代以前日本語 (*pre-Old Japanese*) の連体形が元来甲類 の */ō/* であったと信じている (*Frellesvig, Serafim, Whitman* との個人的な話し合いによる)。上代東国 日本語では連体形は甲類の */ō/* と乙類の */ō/* と書かれているが、上代東国日本語では甲類の */ō/* と乙類の */ō/* の区別が消滅したため、そのような混合した書かれ方も納得できる。私の意見では、連体 形は甲類の */ō/* より乙類の */ō/* であった可能性が高いと思う。その一つの証拠として、上代中央日本語 の繫辞の *h-* の連体形は *h-ō* であることが挙げられる。上に言及した上代東国日本語に現れる *ə* の連 体形はもう一つの証拠であるとも考えられる。少なくとも、上代東国日本語の */ō/* と上代中央日本語 の */ō/* の間に何か密接な関係があったらしい事は確かであろう。たとえば、上代中央日本語の *kōkoro* 「心」と上代東国日本語の *kekere* (古今集二〇・一〇九七) を参照。
- 9 『肥前風土記歌謡』の引用は(秋本 1958)による。しかし、『肥前風土記歌謡』の番号は(土橋 1957) による。そして、万葉仮名の「素」は上代日本語には */Nsō/* ではなく、*/sō/* であるから、仮名の書き 下しには秋本の「ぞ」を「そ」に変えた。
- 10 『肥前風土記』の引用は(秋本 1958)による。
- 11 この歌の「遅」は */w/* である理由については高木氏などの意見も参照(高木など 1957:62: 327)。
- 12 ただし Marc H. Miyake が指摘したように、森(1991)の *v/β* 区別は理解が困難である(2003a: 57-60)。
- 13 『日本書紀歌謡』の引用は(土橋 1957)による。
- 14 『日本書紀』の引用は(黒板勝美 1966)による。

- 15 旭川方言の *peicam* 「岸」は \leftarrow **pet-sam* から発展した形なので (太田 2005: 158)、*peica* には関係がない。
- 16 *imaku* は *imak* 「齒」の所属形 *imak-u* であろう。千島 (鳥居竜蔵資料) *imak*, *imaku* 「齒」(服部 1964: 6) 参照。
- 17 前には **praa HH* として再構した (Vovin 1993: 34-35, 127) が、今は **pi* よりは **py* の再構は自然だと思ふ。
- 18 例外は *somo* が助動詞 *ki* 「する」で伴う場合に、*somo ki* が主動詞の後に出る。

注記 本書のタイトルは日文研フォーラム第二二五回の原題「萬葉集に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布」を改題したものである。

者の方々との貴重な交流を持つ事ができました。また、京都大学でも、田窪行則先生にご尽力いただき、発表の機会をいただきました。その際には、田窪先生より色々なご指導を賜りました。更に、かりまたしげひさ先生のご招待で、琉球大学の言語学学会において発表とそれに続く特別な講演を行う機会も頂きました。厚く感謝を申し上げます。そして、長年、私の支持者であり協力者である長田俊樹先生の総合地球環境学研究所のゼミにもご招待いただき、学会での発表の機会をいただきました。私の今回の日本での滞在をかけたがえの無い貴重なものにして下さった上述の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

日文研の豊富な資料に加え、外部からも貴重な資料を入手する事ができました。特に、CCC 研究所所長である崎谷満先生と北海道教育大学旭川校の井筒勝信先生と手塚順孝先生にアイヌ語に関わる資料を多数いただきました。有難うございました。

愛知大学の須田淳一先生との再会は大変楽しかったです。また、学会に属しない知り合いの方々との再会も有意義でした。

末筆ながら、今回の滞在中、大変にお世話になりました日文研の皆様にも、この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。特に、二度に亘る日文研での滞在中、いつも変わらず私を支持して下さった恩人の鈴木真美先生、私の万葉集の研究に関する様々な質問に親切に答えて下さり、同フォーラムの発表時に貴重なコメントをして下さった光田和伸先生、そして日文研における生活を色々な面から支えて下さった海外研究交流室の奥野由樹子様、佐々木彩子様、小林和夫様、昔の学生で親友のジム・バスキンD君など、皆様のご親切なご援助あってこそその実りたる滞在中でした。



発表を終えて

時が経つのは早いもので、日文研フォーラムの発表を終えて、もう半年以上になるとは信じ難い事です。今回の発表を通して述べたかった事は次の二点です。一点目は、奈良時代以前の上代日本におけるアイヌ語の分布は通常考えられている範囲をはるかに超えた広い地域に渡っていたと思われる事です。この点から、アイヌ人は、おそらく日本列島の原住民であったにちがいないと考えられます。そして二点目は、アイヌ語が日本語の影響を受けた事は勿論ですが、アイヌ語からの日本語への影響も認められるべきだという事です。発表では以上について歴史的言語学の立場から簡単にご説明させていただきましたが、滞在中のカウンターパートの光田和伸先生のコメントの助けもあり、発表後の質疑応答時には学者の方々だけでなく、一般市民の皆様からも非常に興味深い貴重なコメントを多数いただきました。私の発表にお集まりいただいた皆様に、改めて感謝の意を表したいと思います。

さて、私の今回の日文研での研究プロジェクトは「万葉集の英語の翻訳と注釈」でしたが、大勢の方々のご協力をいただき、「万葉集」の第十五巻の翻訳と注釈を完成させる事ができました。これは、私が今後引き続き進めていく他の巻の翻訳と注釈の基礎となる内容となっており、今年四月には英国の Global Oriental 社より出版される予定です。

また、今回の日文研での滞在中には、私自身の研究プロジェクトに携わる以外にも様々な貴重で有意義な経験をさせていただきました。まず、日文研主催の宇野隆夫先生と王維坤先生の共同研究会に参加する機会をいただきました。同研究会では日本古典に現れる剣の名前と「ひれ」についての発表をさせていただきました。この研究会を通して日本の有名な考古学

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>ヤン・シヨコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>キンヤ・ツルヒタ 鶴田 欣也 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禪林の異端者—休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>SHIMAZAKI Hiroshi 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩⑨	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リリーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑩⑩	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑩⑪	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑩⑭	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑩⑯	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑩⑰	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑩⑱	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7	SONG Mia 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫⑫	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫⑬	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアド Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑭	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑮	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑯	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑰	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫②	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong-Eye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑫③	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑫④	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかつたのは誰か—明治の日本」
⑫⑤	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun-da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑫⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑫⑧	13. 4.10	Lǐ Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑫⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭⑤	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラステイブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑦	14. 2.12	マシミアアーン トマシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑬⑩	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光潑 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禪心理学的生命観」
⑬⑪	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑬⑫	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑬⑮	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑩⑩	15. 4. 8 (2003)	ビル ス ウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	PARK JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツイゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑩⑤	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑩⑥	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエーフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑩⑨	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩70	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑩71	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リービン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴェイシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑩77	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑩78	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—」
⑩79	17. 4.12	ノエル ジョン ピニンガトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	IAN ジェームズ マク マレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑬	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベルク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sang Hwan 魯 成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラブチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—」
188	18. 2.21	ウィリアム バック ブレックカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—」
189	18. 3.14	サレ アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐる—」

①90	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金 容儀 (全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ-なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか-」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔 博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象-18世紀朝鮮通信使の目から-」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉 春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
①93	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周 維宏 (北京日本学研究中心教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について-中日農村を比較して-」
①94	18. 9.19	ダリア シュバンバリーテ Dalia SVAMBARYTĖ (リトアニア ビリニウス大学講師・日文研外国人研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐる」
①95	18.10.10	エドウィーナ パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」-高等教育の社会科カリキュラムを中心に-」
①96	18.11.14	ヨセフ キブルツ Josef A. KYBURZ (フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「お札が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート エスキルドセン Robert ESKILDSEN (日文研外国人研究員) 「異国船物語-江戸後期に描かれた船-」
①98	19. 1.16 (2007)	プラット アブラハム ジョージ Pullattu Abraham GEORGE (ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員) 「日印関係とインドにおける日本研究-宮沢賢治の素食主義の思想-」
199	19. 2.13	スティリアノス パパアレクサンドロプロス Stylianos PAPALEXANDROPOULOS (アテネ大学神学部 準教授 日文研 外国人研究員) 「日本仏教論-その思想史的展開をめぐる-」

200	19. 3.13 (2007)	LU Liu Di 陸 留弟 (華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員) 「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」
201	19. 4.18	モ ハ メ ヲ ヲ ヲ レ ザ サ ル カ ー ル ア ラ ニ Mohammad Reza SARKAR ARANI (アラメ タバタバイ大学教育学部(イラン)助教授・日文研外国人研究員) 「国境を越えた日本の学校文化」
202	19. 5.16	ZHANG ZheJun 張 哲俊 (北京師範大学文学院比較文学研究所教授・日文研外国人研究員) 「唐代文学における日本のイメージ」
203	19. 6.13	チャワーリン サウエッタナン Chavalin SVETANANT (チュラーロンコーン大学専任講師・日文研外国人研究員) 「『気』の思想・『こころ』の文化—言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方—」
204	19. 7.25	シンシア ネリ ザヤス Cynthia Neri ZAYAS (フィリピン国立大学国際研究センター準教授・日文研外国人研究員) 「淡路島における災害と記憶の文化—荒神信仰を中心に—」
205	19. 9.11	チャン ティ チュン トアン TRAN Thi Chung Toan (ベトナム国立ハノイ国家大学助教授・日文研外国人研究員) 「宮本常一の民俗誌を通して見た日本女性と日本文化理解」
206	19.10.10	パイ ヒ ヨ ン イル PAI Hyung Il (カリフォルニア大学サンタバーバラ校準教授・日文研外国人研究員) 「朝鮮旅行案内書に見る日本人のロマン」
207	19.11.14	KIM YoungCheol 金 榮哲 (漢陽大学校日本語文化学部教授・日文研外国人研究員) 「遊興の『花』としての理想—妓生と遊女—」
208	19.12.12	WANG Weikun 王 維坤 (西北大学国際文化交流学院教授・副院長・日文研外国人研究員) 「中国出土の文物からみた中日古代文化交流史—和同開珎と井真成墓誌を中心として—」
209	20. 1.16 (2008)	ブライアン 小野坂 ルバート Brian Onozaka RUPPERT (イリノイ大学東アジア学科・宗教学科准教授・日文研外国人研究員) 「懺悔・供養・修法 —前近代日本仏教の心を探る—」

210	20. 2.26 (2008)	マイク モラスキー Michael S. MOLASKY (ミネソタ大学准教授・日文研外国人研究員) 「関西のジャズ喫茶文化」
211	20. 3.18	グニラリンドバーグワダ Gunilla LINDBERG-WADA (ストックホルム大学主任教授・日文研外国人研究員) 「北極から日本へ ―スウェーデン探検隊が見た明治日本―」
②12	20. 4.23	ZHOU Jian 周 見 (中国社会科学院世界経済政治研究所教授・日文研外国人研究員) 「洪沢栄一と張謇 ―日中近代企業家に関する一つの比較―」
213	20. 5.14	KIM Jeong Hae 金 貞恵 (釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「小説を通してみたグローバル時代の在日コリアン」
214	20. 6.11	フレデリック ジラルド Frédéric GIRARD (フランス国立極東学院教授・日文研外国人研究員) 「ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ―エミールギメと日本の僧侶神主との問答―」
②15	20. 7. 9	アレキサンダー ヴォヴィン Alexander VOVIN (ハワイ大学マノア校東洋言語文学部教授・日文研外国人研究員) 「萬葉集に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布」
②16	20. 9.11	KIM Pil Dong 金 弼東 (世明大学校日本語学科副教授・日文研外国人研究員) 韓国における日本研究が語るもの
217	20.10. 9	WANG Zhongchen 王 中忱 (清華大学人文社会科学学院教授・日文研外国人研究員) 1930年代の『改造』における魯迅の日本越境
②18	20.11.12	ジェームズ バスキンド James BASKIND (日文研海外研究交流室プロジェクト研究員) 日本における禅浄双修―黄檗宗を中心として
219	20.12.10	ノリコ マナベ Noriko MANABE (ニューヨーク市立大学非常勤講師・日文研外来研究員) 洋楽ジャンルの適応と変遷：童謡、ヒップホップとレゲエの事例研究

220	21. 1.16 (2009)	<small>GUO Nanyan</small> 郭 南燕 (日文研准教授) 志賀直哉の関西観
221	21. 2.17	<small>HU BaoHua</small> 胡 宝華 (南開大学歴史学院准教授・日文研外国人研究員) 内藤湖南の中国学界に与えた影響

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

発行日 2009年3月12日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

©2009 国際日本文化研究センター